

# 文法化現象の一例

——名詞「気味」から接尾辞「一気味」への変遷——

秋 元 美 晴

## 0. はじめに

明治期に書かれた小説には、「お勢は冷笑の気味で」（『浮雲』明治20年、以下明治はM, 大正はT, 昭和はSと表記する）や、「風が強く吹く日には少し揺れる気味はあるが」（『彼岸過迄』M.45）のように「そのような様子や傾向にあることを表す」意味で名詞の「気味（きみ）」が使われている例がしばしば見られる。現在でも「胃潰瘍の気味がある」のように、この意味で「気味」が用いられることもある。しかし、現在は上記の2例の場合、前者は「冷笑気味」、後者は「揺れ気味」のように、名詞の「気味（きみ）」を用いず、接尾辞の「一気味（ぎみ）」を使うことがほとんどであろう。

本稿では、「そのような様子や傾向にあることを表す」意味の名詞として使用されていた「気味（きみ）」が、いつ頃から接尾辞「一気味（ぎみ）」として使用されることが多くなっていったのか、つまり、その文法化の変遷を明らかにしていきたい。

## 1. 文法化

Hopper and Traugott の *Grammaticalization* では、文法化現象について

---

恵泉女学園大学 人文学部紀要 第10号 pp. 3~pp. 22, 1998

「文法化現象の一例」

——名詞「気味」から接尾辞「一気味」への変遷——

秋 元 美 晴

以下のように述べている。

……grammaticalization as the process whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammaticalization functions, and once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions. (1993 : xv)

文法化は、言語変化の一過程としてとらえられ、たとえば、自立語の中でも、特に主要範疇である名詞や動詞などが付属語化する現象などをいう。

## 2. 『日本国語大辞典』の名詞「気味」の記述

『日本国語大辞典』によると、「気味」には4つの語釈が与えられている。

- ①物のにおいと味。多く食べる物について用いられる。きび。
- ②おもむき。けはい。風味。また、特に、深くてよい趣や味わい。きび。
- ③心身に感じること。また、その感じた心持。気持。きび。多く、「良い」「悪い」を伴って用いられる。
- ④いくらかその傾向にあること。また、その傾向。かたむき。きび。

表-1は、それぞれの意味でいつ頃から使われ始めたのかを通時的に概観するためのものである。

〔表-1〕

	『名語記』	『山中人饒舌』	現在
①物のにおいと味。	1275	1813	
②おもむき。けはい。	1212	1725	
風味。			
③心身に感じること。		『傾城壬生大念仏』 1702	→
気持。			
④いくらかその傾向		『志都の岩屋講本』 1811	『行人』 1912
にあること。傾向。			

用例の最も古いのは、②の『方丈記』の1212年であり、「そのような様子や

傾向にあることを表す」意味で用いられる④の初例は、次の1811年の『志都の岩屋講本』のものである。

薬の病にきく処は呪禁（まじなひ）の気味が有る故

### 3. 『日本国語大辞典』の接尾辞「気味（ぎみ）」の記述

一方、『日本国語大辞典』では接尾辞「一気味（ぎみ）」の語釈は、「動詞の連用形に付いて名詞，形容動詞をつくり，そのような様子，傾向にあることを表す。……のようす。」とあり，初例として，島崎藤村の『家』（M.43）が挙げられている。

正太は前方へ曲（こご）み気味に，叔父をよく見ようとするやうな眼付をした

『日本国語大辞典』によれば，接尾辞の「一気味（ぎみ）」は同じ意味の名詞の「気味④」の用法が現れて約100年してから出現したことになる。

### 4. 資料

先に述べたように、『日本国語大辞典』によれば，名詞「気味④」の用法が現れたのは1811年となっている。このため，江戸期から明治，大正，昭和にいたるまでの名詞「気味④」と接尾辞「一気味（ぎみ）」の使用状況を概観していく。

江戸期の使用状況は、『日本古典大系』の総索引を用いてデータを収集した。

明治期の資料としては，主に『CD-ROM版 新潮文庫明治の文豪』を利用したが，この中に収められている13作家の40冊の文庫本には，明治0年代と10年代の作品が含まれていないため，明治0年代の作品として『西洋道中膝栗毛』（M.3）を，また，10年代の作品としては『金之助の話説』（M.11）を用いた。CD-ROM版を利用する際は，ひらがなで「きみ」，「ぎみ」，そして，漢字で「気味」と検索した。明治期と大正期は「きみ」「ぎみ」の使用例は皆無であったが，昭和期には「ぎみ」の使用例が見られた。ここで注意しなければならないことは，特に明治期の作品は，表記が一定しておらず，「気味」を用いないで，次の例のように「光景」という漢字に振り仮名で「きみ」とす

る二葉亭四迷のような作家がいることである。

……お政もスコだれの拍子抜けという光景（きみ）でいや味の音締（ねじ）  
めをするようになったから……（『浮雲』M.20）

このようないわゆる当て字まではコンピュータで検索することができないので、実際の使用例はもっと多いかもしれないことを注意しておかなければならない。これは、以下も同様である。

大正・昭和期は、主として『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』を資料とした。なお、この100冊の中には、明治期に書かれた作品やいわゆる翻訳物も含まれているが、まず、翻訳物は除外し、残る67作家の作品のうち明治期に書かれた作品は明治期のデータとして用いた。

収集した203例のデータの内訳は以下のとおりである。

品詞類 \ 時代	明治	大正	昭和	
名 詞「気味」	62	16	6	84
接尾辞「一気味」	16	3	100	119
合 計	78	19	106	203

## 5. 分析

ここでは、江戸、明治、大正、昭和、の4期に分け、名詞「気味④」（以下名詞「気味④」は名詞「気味」と表記する）と接尾辞「一気味（きみ）」の使用状況を見ていく。

### 5-1. 江戸期

『日本古典文学大系』の総索引には、「気味」の用例は、江戸期に『近世随想集』「ひとりね 上」（1724年ごろ）の1例があった。

見事に勝からは、たしかに手をとらずに勝たがよしといふ気味なり。  
とあり、名詞「気味③」の意味で用いられており、「気味④」の例は見られな

かった。従って、「気味④」の用例の初例は『日本国語大辞典』の『志都の岩屋講本』(1811)と見なし、本稿を進めていくこととする。

## 5-2. 明治期

この期の名詞「気味」と接尾辞「一気味(ぎみ)」の使用例は、合計78例である。このうち名詞「気味」の使用例は『浮雲』の「光景」をいれて62例であり、接尾辞「一気味(ぎみ)」は、『金之助の話説』の「放心気味(うかれきみ)」を含めて16例である。

### 5-2-1. 明治期の名詞「気味」の使用例の分析

名詞「気味」は必ず連体修飾成分を伴って使われ、62例は以下のようなAからGの7つの連体修飾構造をとる。

#### A. 名詞+の+気味……24例

1. 今初まった事では無いが、先刻から酔醒めの気味で咽喉が渴く。

(『浮雲』M.20)

2. 奥様は、と云うと、少々御風邪の気味。

(『女系図』M.40)

3. ……少しは得意の気味で、ただ坑夫になりたての幅の利かない所だけを

(『坑夫』M.41)

上の3例も含め、24例の連体修飾成分の名詞を意味別に分類すると、以下のとおりである。

心情を表す名詞…冷笑(『浮雲』M.20), 投げやり(『われから』M.29), 肝(『われから』M.29), 狼狽(『吾輩は猫である』M.38-2例), 拍子抜け(『吾輩は猫である』M.38), 不本意(『吾輩は猫である』M.38), 逆上(『吾輩は猫である』M.38-2例), 場うて(『吾輩は猫である』M.38), 自暴(やけ)(『草枕』M.39), 不服(『其面影』M.39), 塞ぎ(『坊っちゃん』M.39), 不平(『趣味の遺伝』M.39), 得意(『坑夫』M.41), 遠慮(『彼岸過迄』M.45)

病気を表す名詞…熱(『金色夜叉』M.30-36), 風邪(『趣味の遺伝』M.39-2例,

『女系図』 M.40, 『門』 M.43— 4例)

その他の名詞……酔醒 (『浮雲』 M.20), 競争 (『坑夫』 M.41), 反っ歯 (『三四郎』 M.41)

この名詞を修飾成分とする使用例が64例中24例と最も多い。また、修飾成分である名詞を意味的にみると、心情を表す名詞が多く、その中でも「投げやり」「狼狽」「逆上」「やけ」「遠慮」「不平」など、好ましくない心情を表す名詞が目立つ。反対に好ましい意味を表す名詞は「得意」の1例しかない。病気を表す名詞もその他の名詞も良くない意味を表す名詞である。つまり、ほとんどが悪いイメージの名詞である。

B. ～という気味…… 4例

4. ……少し無理にという気味で言葉を継いだ。 (『めぐりあひ』 M.21)

5. ……樹で云えばこの頃接木をしたばかり、酒で云えば未だ醗酵中という気味である。 (『片恋』 M.29)

の2例のほかに、「手持無沙汰という気味」(『浮雲』 M.20), 「独断専行という気味」(『其面影』)があるが、4例とも「という」の前は良くない意味である。

C. ～ような気味…… 4例

6. 「そう外思えないたって……,」と少し甘えるような気味もある。 (『其面影』 M.39)

7. ……三四郎は何となく疲労した様な気味で、二階の窓から頬杖を突いて, (『三四郎』 M.41)

の2例のほかに、「待ちくたびれたような気味」(『めぐりあひ』 M.21), 「銜う様な気味」(『吾輩は猫である』 M.38)の2例あるが、「ような」の前の4語もみな良くない意味の語である。

D. 動詞句+気味……14例

8. 頭ごなしに罵ろうとして、反って丑松の為に言敗られた気味があるので、軽蔑と憎悪とは猶更容貌の上に表れる。 (『破戒』 M.39)

9. ……松本の風采なり態度なりが、如何にもそう云う階級の代表者らしい感じを、少し不意を打たれた気味の敬太郎に投げ込んだのは事実であった。 (『彼岸過迄』 M.45)

この2例のほかに以下の12例がある。

「堪えかねた気味」(『あひびき』 M.21), 「何処となく止度気ないのを飾る気味」(『あひびき』 M.21), 「何かうっとりした気味」(『めぐりあひ』 M.21), 「なぐさみ楽しんでいる気味」(『めぐりあひ』 M.21), 「安心した気味」(『めぐりあひ』 M.21), 「安心した気味」(『めぐりあひ』 M.21), 「些しぐたりとした気味」(『めぐりあひ』 M.21), 「少し浮く気味」(『吾輩は猫である』 M.38), 「明かにそうと自認し得なかった気味」(『平凡』 M.40), 「安心した気味」(『平凡』 M.40), 「急に癩癩の角を折られた気味」(『門』 M.40), 「少しはあっけに取られた気味」(『彼岸過迄』 M.45)

動詞句を意味的にみると、8、9のように好ましくない状態を表しているものが、14例中8例あり、反対に「何かうっとりした」、「安心した」のように心の良い状態を表している例が5例ある。また、「少し浮く」のように単なる状態を表している例が1例ある。

#### E. 文相当+気味……12例

10. ガギンは、相変らずとは云うものの、この時ばかりは少し狼狽した気味も有って、微笑しながら……, (『片恋』 M.29)
11. 病が病だから、蓮太郎の方では遠慮する気味で、そんなことで迷惑を掛けたく無い, (『破戒』 M.39)
12. 主税は少々あせった気味で…… (『女系図』 M.40)

この3例のほかに、以下の9例ある。

13. 鈴木君は少し凹んだ気味で…… (『吾輩は猫である』 M.38)
14. あまり洒落だから、余は少しく先を越された気味で、段上に立って、坊主を見送ると…… (『草枕』 M.39)
15. それで常も小競合のみで、大衝突は双方で避ける気味があるのであるが……, (『其面影』 M.39)

16. 今まで貴女は余り……，幾分か姉様や阿母さんに圧迫されてた気味も有ったかねえ。 (『其面影』 M.39)
17. ……寧ろ湯上りで，精神が弛緩した気味に見えた。 (『門』 M.43)
18. ……宗助は少し驚いた気味で，暑苦しい…… (『門』 M.43)
19. 御米は少し氣を腐らした気味で，屏風の話はそれなりにした。 (『門』 M.43)
20. それでも彼は凝としている積であったが，仕舞に東窓から射し込む強い日脚に打たれた気味で，少し頭痛がし出したので…… (『彼岸過迄』 M.45)
21. この二階は須永の書齋にするため，後から継ぎ足したので，風が強く吹く日には少し揺れる気味はあるが…… (『彼岸過迄』 M.45)

これらの例の中には，14や16，20のように受身文や21のように，途中に挿入句の入るかなり長い文もある。

現在は，DやEのように名詞「気味」の連体修飾成分として動詞句や文相当をとることはほとんどとないといってよい。

#### F. 連体詞+気味……2例

22. 「すこしそういう気味も有ますなあ」と文平は如才なく。(『破戒』 M.39)
23. どの学科も皆多少ともこの気味がある。(『平凡』 M.40)

#### G. その他……1例

24. ……人を憎むことは一寸出来難い気味がある。(『其面影』 M.39)

#### 5-2-2. 明治期の接尾辞「一気味 (ぎみ)」の使用例

先にも述べたようにこの期の接尾辞「一気味 (ぎみ)」の使用例は以下のよう  
に16例ある。このうち25の『金之助の話説』(M.11)の1例は，ふりがなが「うかれぎみ」となっており，「うかれぎみ」となっていない。これが誤植でないなら，名詞「気味 (きみ)」が接尾辞化したときに見られる清音から濁音への変音現象が見られないことになり，名詞の「気味」が接尾辞になる過渡

期の良い例と考えられる。

25. 何様やら放心気味（うかれきみ），（『金之助の話説』 M.11）

次に15例の接尾辞「一気味」の下接する前要素を品詞別に分類すると、以下の2つに分類される。

A. 名詞+気味（ぎみ）……7例

26. ……やがてスコシ絶望気味（やけぎみ）で……（『浮雲』 M.20）

27. ……と、少しやけ気味な口振である。（『生』 M.41）

他の5例も次のように心情を表す名詞で、それも好ましくない心情を表す名詞「やけ」が4例で、「焦躁」が1例である。

「焦躁気味」（『其面影』 M.39）、「自棄（やけ）気味」（『其面影』 M.39－2例、『女系図』 M.40－2例）

B. 動詞の連用形+気味（ぎみ）……8例

28. ……と私は少し焦れ気味になった，（『片恋』 M.29）

29. と些と持ち上げて、浮かせ気味に物馴れた風で……，（『女系図』 M.40）

30. 梅雨はやや晴れ気味で、心持の好い光線が雲の間から洩れるようになったが、一家は相変わらず暗かった。（『生』 M.41）

他の5例は、「焦れ気味」（『吾輩は猫である』 M.38）、「洩り気味」（『其面影』 M.39）、「急込み気味」（『其面影』 M.39）、「笑い気味」（『生』 M.41）、「下げ気味」（『土』 M.43）である。

前要素の意味は、「焦れ」と「洩り」、「急込み」は良くない心情を表している。また、「下げ気味」も悪い意味だが、「笑い気味」と42の「晴れ気味」の「笑い」と「晴れ」は、好ましい意味である。

以上、明治期の名詞「気味」と接尾辞「一気味（ぎみ）」の使用例の分析をまとめると次のようなことが言えよう。

明治期の名詞「気味」の使用例と接尾辞「一気味（ぎみ）」の使用例を比べると、62例対16例と名詞「気味」の方が約4倍多い。この期の名詞「気味」の

A～Gの7つの分類を統語論的にみると、Aのように「名詞+の」をはじめとし、Fのように連体詞とも、BやCのように句や文を導入するような「という」や「ような」とも、また、Dのように動詞句やEのような文相当とも、連体修飾構造を構成する。これは名詞「気味」の普通の名詞としての性格を反映していると言えよう。しかし、Aの「名詞+の+気味」が62例中24例と約4割を占めることから分かるように、名詞「気味」が接尾辞になる条件を備えていたともいえるのではないだろうか。一方、連体修飾成分を意味的にみると、AとBとC、それにEの大部分が好ましくない意味であるが、Dの動詞句の連体修飾成分には、「安心した気味」のような好ましい心情を表している例も5例ほどあり、また、「少し浮く気味」のような単なる体の状態を表しているものもある。

### 5-3. 大正期

大正期はその期間も15年と短いため、作品数も多くなく、従って使用例も19例と少ない。19例のうち名詞「気味」の使用例は16例であり、3例が接尾辞「一気味（ぎみ）」の使用例である。

#### 5-3-1. 大正期の名詞「気味」の使用例の分析

連体修飾構造を明治期と同様に分類すると、次のように3つに分類される。

##### A. 名詞+の+気味……6例

31. 先生が調子に乗らない如く、私も拍子抜けの気味であった。

（『こゝろ』T.3）

32. ……ふだんは己惚れの強い彼女も、夫人の前へ出てはさすがにちょっと狼狽の気味で、夫人が何か一言二言云いながら……

（『痴人の愛』T.13～14）

他の4例は、「拍子抜けの気味」が『こゝろ』のもう1例あり、そのほか「風邪の気味」（『こゝろ』T.3）、「癩の気味」（『道草』T.4）、「手持無沙汰の気味」（『明暗』T.5）である。名詞を意味別に分類すると、心情を表す名詞それも「拍子

抜け」「手持無沙汰」「狼狽」のように良くない心情を表すものばかりである。また、「風邪」「癩」は病名である。つまり、6例とも好ましくない意味の名詞である。

#### D. 動詞句+気味……2例

33. 狼狽した気味の私は、早速先生の所へ出掛けて、私の読まなければならない参考書を聞いた。 (『こゝろ』T.3)

34. 骨董という言葉には、器物に関する人間の愛着や欲念の歴史の目方が積りに積っていて、古美術というような蓋は、どうも軽過ぎる気味があるようである。 (『骨董』T.15)

この分類にあてはまるのは、この2例だけである。意味は良くない心情をあらわす「狼狽する」というサ変漢語動詞であり、「軽過ぎる」は「軽い」と「過ぎる」からなる複合語で、「過ぎる」が「物事がある程度を越えている」という好ましくない意味を表している。

#### E. 文相当+気味……8例

35. 少し物々しさに打たれた気味で、一体この孔雀は何処から来たのだらうという顔付をした。 (『明暗』T.5)

36. そしてやめようと仲田の云うのを心配する気味だった。(『友情』T.8)

このほか、「自分は少し釣り込まれた気味で」、「多少彼を焦らす気味でいたのは」「勢い後へ振り返る気味で」「少し温気に蒸される気味であった」「狐に撮ままれた気味で座っていた」(以上、5例は『行人』T.1)、「私も幾分スポイルされた気味があらましよう」(『こゝろ』T.3)の6例ある。受身文もあることは「気味」がある意味では普通の名詞であったことを意味していよう。意味的に見た場合、文相当の修飾成分の8例はあまり好ましい意味ではないように思われる。

#### 5-3-2. 大正期の接尾辞「一気味(ぎみ)」の使用例の分析

この期の接尾辞「一気味(ぎみ)」の使用例は次の3例である。

A. 名詞+「気味（ぎみ）」……1例

37. その晩彼は明らかに多少風邪気味であるという事に気がついた。

(『道草』T.4)

B. 動詞の連用形+「気味（ぎみ）」

38. 少し乾燥（はしゃ）ぎ気味になった津田はすぐ付け加えた。

(『明暗』T.5)

39. 折から晴れ気味なった雲間を漏れる日の光が、地面の蔭日向を……

(『生まれ出づる悩み』T.7)

この期は名詞の「気味」の使用例の方が接尾辞「一気味（ぎみ）」の使用例より多く、接尾辞の前要素には39のようによい意味を表す動詞もある。

5-4. 昭和期

この期は名詞「気味」の使用例が6例で、接尾辞「一気味（ぎみ）/一ぎみ」の使用例が100例あり、合計106例あった。全体の9割強が接尾辞「一気味（ぎみ）/一ぎみ」の使用例と、圧倒的に接尾辞の使用例が多くなっていることがわかる。

5-4-1. 昭和期の名詞「気味」の使用例の分析

A. 名詞+の+気味……5例

40. このところ少々やりすぎの気味はあったが、おぬしほどの智者だ、なにか十分な存念があろうと思ひ、ことさらに言わなんだ。

(『国盗り物語』S.38~41)

41. そしてこの末の子は腺病質の気味があり、たとえ何も流行していなくても……

(『榆家の人びと』S.39)

42. しかし専門医がいくらか肺浸潤の気味があると言ったし、

(『榆家の人びと』S.39)

43. ……一同ややたじたじの気味で希望する者が無い。

(『山本五十六』S.40)

44. 六区の人手平日と変わりなくオペラ館楽屋の雑談亦平日の如く恐怖感激

昂奮の気味更になし。

(『山本五十六』 S.40)

この5例のうち、40の例は小説の時代設定が戦国時代の天下統一のころであり、この文も当時の話し言葉をまねて書かれたものと思われる。また、43と44の例は軍人の山本五十六について書かれたものであるためか、全体的に固い文体であり、特に44の例などは全く漢文訓読調である。つまり、3例とも特殊な文脈の中で使われていることがわかる。41と42の例は、名詞の中でも「腺病質」「肺浸潤」と一種の病名である。この「病名+の+気味」は、現在でも時々使われる用法である。意味的に見た場合は、5例の名詞とも好ましくない意味である。

#### E. 文相当+気味……1例

45. ……私が月並なことを言ったのも、多少彼に景気をつけてやる気味があったかもしれない。  
(『草の花』 S.29)

この分類に属する例はこの1例のみである。

#### 5-4-2. 昭和期の接尾辞「一気味(ぎみ)／一ぎみ」の使用例の分析

使用例は全部で100例あり、このうち「一気味(ぎみ)」と漢字表記で書かれた例は81例であり、「一ぎみ」とひらがな表記で書かれた例は19例である。同一作家で同一作品の中で漢字表記とひらがな表記の両方を使用している例もある。

#### A. 名詞+気味(ぎみ)／ぎみ……53例

46. ……だ**いぶ逆上ぎみ**の辰子に余計な口をきかせまいとする手でもあるらしく、  
(『葦手』 S.10)
47. ……ギリシャ型の細くすらりとした鼻梁、少し受口**ぎみ**に開いている薄い唇、  
(『草の花』 S.29)
48. ……睡眠不足が加われば、多少妄想**気味**になるのもやむを得まい。  
(『砂の女』 S.37)
49. たとえ心房中隔欠損**ぎみ**の心臓であっても、  
(『二十歳の原点』 S.46)
50. 左でアッパー**気味**のフックを放った。  
(『一瞬の夏』 S.56)

51. ちょっと時代錯誤気味の中折れ帽, (『新橋烏森口青春篇』 S.60)

上の例でも分かるように、名詞は和語、漢語、外来語の語種があり、49や51のようになんかなり長い漢語の例もある。意味的に見ると、以下のように分類できる。

心情を表す名詞……逆上 (『葦手』 S.10-2 例, 『かよひ小町』 S.22), 狼狽 (『砂の女』 S.37), 妄想 (『砂の女』 S.37), 困惑 (『砂の女』 S.37), はったり (『楡家の人びと』 S.39), 自棄 (『剣客商売』 S.47), 憤慨 (『若き数学者のアメリカ』 S.53), 八つ当たり (『ある曇った朝突然に……,』 S.57, 『試練の時』 S.57), やけっぱち (『ストライキ突入』 S.57)

病気を表す名詞……風邪 / かぜ (『人間失格』 S.23, 『二十四の瞳』 S.27, 『太郎物語』 S.50, 『あすなろ物語』 S.33, 『楡家の人びと』 S.39-2 例, 『孤高の人』 S.44, 『花埋み』 S.45, 『新橋烏森口青春篇』 S.60), 下痢 (『飼育』 S.33, 『戦いの今日』 S.33), ヒステリー (『楡家の人びと』 S.39-2 例), 不眠症 (『楡家の人びと』 S.39), 神経衰弱 (『山本五十六』 S.40), 脱肛 (『プアボーイ』 S.42), ノイローゼ (『若き数学者のアメリカ』 S.53-2 例), 心房中隔欠損 (『二十歳の原点』 S.46), 斜視 (『エディプスの恋人』 S.56), 貧血 (『新橋烏森口青春篇』 S.60), 酒乱 (『新橋烏森口青春篇』 S.60)

病気に準ずる名……寝不足 (『新社長の一日』 S.57)

詞

身体の様子……受口 (『草の花』 S.29), 猫背 (『楡家の人びと』 - 6 例), 若禿 (『聖少女』 S.40), 蒼白 (『若き数学者のアメリカ』 S.53)

特殊な動作を表す名詞……アッパー (『一瞬の夏』 S.56-4 例), カウンター (『一瞬の夏』 S.56), フック (『一瞬の夏』 S.56), スイング (『一瞬の夏』 S.56)

その他……ガレ (『孤高の人』 S.44), 時代錯誤 (『新橋烏森口青春篇』 S.60)

病気を表す名詞、及びそれに準ずる名詞が23例と最も多く、次に心情を表す名詞が12例であるが、どれも良くない意味である。身体の様子を表す名詞の9例も、その他の2例もこれも好ましくない意味をあらわす名詞である。つまり、ほとんどが好ましくない意味を表す名詞だといえよう。ただ、ボクシングというスポーツの特殊な動作を表す外来語の名詞の7例は単に動作の様子を表しているにすぎないようである。

B. 動詞の連用形+気味(ぎみ) / ぎみ……47例

52. 季節はその間に、いままで少し遅れ気味だったのを取り戻すように……  
(『風立ちぬ』 S.13)

53. とくに青木弁護士指摘は鋭く、弁護側のほうが押しぎみだった。  
(『人民は弱し、官吏は強し』 S.42)

54. 関西の山岳界は、とかく、関東の山岳界におされ気味だった。  
(『孤高の人』 S.44)

55. ……叔母はそれでも同じ入院患者の家族の、もてあまされ気味の老婆を  
付添人に世話してくれ、  
(『焼土層』 S.42)

47例の中には54と55のように動詞に受身を作る助動詞がついている例もあったが、Bの分類に入れた。意味的に分類すると以下のように4つに分類される。

心情を表す動詞の連用形……気圧(けおされ)(『葦手』 S.10), あわて(『葦手』 S.10, 『砂の上の植物群』 S.39), じらし(『葦手』 S.10), 押され(『処女懐胎』 S.22, 『国盗り物語』 S.38~S.41, 『孤高の人』 S.44-2例), ずるけ(『草の花』 S.29), からかい(『国盗り物語』 S.38~41), むずかり(『榆家の人びと』 S.39), 押し(『人民は弱し、官吏は強し』 S.42), うろたえ(『アメリカひじき』 S.42), 持て余し/もてあまし/もて余し(『孤高の人』 S.44, 『新源氏物語』 S.53, 『若き数学者のアメリカ』 S.53), 諦め(『若き数学者のアメリカ』 S.53), あせり/焦り(『孤高の人』 S.44,

『エディプスの恋人』 S.56), ふてくされ (『最後の賭け』 S.57, 『因果は巡る』 S.57- 2 例), 自棄／やけ (『花埋み』 S.45, 『因果は巡る』 S.57), もてあまされ (『焼土層』 S.42)

身体の状態を表す動詞の…… (眉・目尻が) 下がり (『雪国』 S.10- 2 例, 連用形 『楡家の人びと』 S.39), つりあがり (『忍ぶ川』 S.36), 肥り／太り (『国盗り物語』 S.38~S.41, 『一瞬の夏』 S.56, 『既製キャリアウーマン』 S.57, 『新橋烏森口青春篇』 S.60), 丸め (『孤高の人』 S.44), 吊り上げ (『孤高の人』 S.44), せりだし (『新橋烏森口青春篇』 S.60), かすれ (『アメリカひじき』 S.42), 噎れ (『花埋み』 S.45)

動作を表す動詞の連用形……遅れ (『風立ちぬ』 S.13), よろけ (『処女懐胎』 S.22), 上げ (『国盗り物語』 S.38~S.41), 伏せ (『国盗り物語』 S.38~S.41, 『犯罪の裏には』 S.57), そらせ (『新橋烏森口青春篇』 S.60)

状態を表す動詞の連用形……散り (『二十歳の原点』 S.46), (相場が) 下がり (『人民は弱し, 官吏は強し』 S.46)

心情を表す動詞の連用形が最も多く25例あり, 意味的には, どれも良くない心情を表す動詞ばかりである。身体の状態を表す動詞の連用形の14例もどれも好ましくない状態を表しており, 状態を表す動詞の連用形の2例も好ましくない状態を表している。しかし, 動作を表す動詞の連用形の6例のうち, 「よろけぎみ」の「よろけ」は, 好ましくない意味の動詞であるが, あとの5例は単に動作を表しているのみの動詞であり, 評価は含まれない。

## 6. まとめ

以上, 主に明治期から昭和期にいたる約130年間にわたる名詞「気味(きみ)」から接尾辞「一気味(ぎみ)」への変遷を見て来た。

4.資料の「表」をみるとわかるように、使用例の数から見ると、明治期と大正期には、名詞「気味」の使用例が接尾辞「一気味(ぎみ)」の使用例をはるかに上回っているにもかかわらず、昭和期に入ると、名詞「気味」の使用例はほとんど見られなくなる。反対に接尾辞「一気味(ぎみ)」の使用例がどんどん増加していく。昭和期の使用例106例のうち、名詞「気味」の使用例はわずか6例であり、その作品も昭和40年代初めまでに書かれたものである。

明治期と大正期に多く見られた名詞「気味」であるが、この名詞は必ず修飾成分を伴って用いられている。明治期には、頻度順に並べれば、「名詞+の」(24例)、「動詞句」(14例)、「文相当」(12例)、「～という」(4例)、「～のような」(4例)、「連体詞」(2例)、その他(1例)の7つの連体修飾成分をとったが、大正期には、「名詞+の」(6例)、「動詞句」(2例)、「文相当」(8例)のみとなる。明治期、大正期の「文相当」には受身文もある。この点では名詞「気味」は普通の名詞と変わりがないようであるが、先にも述べたように、必ず連体修飾成分を伴って名詞句を作るということは形式名詞(注1)に近いといえよう。このことは名詞「気味」の実質的意義が薄いということの意味しており、名詞「気味」は統語的にも、意味的にも接尾辞になる条件を備えていたといえる。

昭和期に入ると、名詞「気味」は、「文相当」の連体修飾成分をとる使用例が1例と、「名詞+の」の連体修飾成分をとる使用例が5例見られるのみとなる。前者の1例は昭和29年の作品に見られるだけで、それ以後は見られない。また、後者の使用例は歴史物語のような特殊な文脈の中で使われるか、あるいは「病名+の+気味」の2例のみとなる。現在でも名詞の「気味」が使われるのは、「胃潰瘍の気味がある」や「働き過ぎの気味」のような後者の例であるが、これは明治期の名詞「気味」の使用例の4割強が「名詞+の+気味」であった痕跡であろうか。ともかく、「文相当」や「動詞句」などの連体修飾成分がなくなっていったということは、名詞「気味」が接尾辞「一気味(ぎみ)」に移行したことを示している。

昭和期には、接尾辞「一気味(ぎみ) / 一ぎみ」の使用例が100例と急増する。前要素に名詞をとるものと動詞の連用形をとるものに二分できるが、動

詞の連用形は居体言であり、名詞と同様と考えられるので、100例全部を名詞と考えることもできる。例の多さが示しているように接尾辞「一気味(ぎみ)／一ぎみ」は、さまざまな意味の名詞を前要素としてとることになる。

ところで、明治期の名詞「気味」の使用例で最も頻度が多い連体修飾成分は先にも述べたように「名詞+の」であった。やがて、この「の」は複合名詞を構成する時に脱落するように、接尾辞化した名詞につく時も脱落する。その結果、名詞+接尾辞化名詞→名詞+接尾辞と変化していくと考えられる。以上のように、名詞「気味」は、その統語的分布や意味の面で既に文法化する潜在性を持っていたと言える。

名詞「気味」の連体修飾成分を意味的にみると好ましくない意味を表しているものが多いが、接尾辞「一気味(ぎみ)」の前要素もそのほとんどが好ましくない意味を表す名詞である。

その他、接尾辞になる過程で起こる濁音化による変音現象も文法化へのひとつの証拠となろう。また、表記の面でも、昭和期に入り、ひらがな表記「一ぎみ」が現れるが、このことも名詞「気味」から接尾辞へ変化していく過程で、名詞性がより希薄化し、接尾辞化が一段と進んだことを意味していると言えよう。

なお、Hopper (1991) は、文法化にいたる5つの原理として、layering (層状化)、divergence (分岐)、specialization (特殊化)、persistence (持続)、de-categorialization (非範疇化)をあげているが、名詞「気味」から接尾辞「一気味(ぎみ)」への変化はdivergence (分岐)に最も近い現象と言えよう。(注2)

注1 本稿では、名詞でもそれ自体の実質的意義が薄く、連体修飾成分を受けて名詞句を作るものを形式名詞とした。

注2 詳しくは拙論「文法化現象」を参照されたい。

#### 主な資料

1. 『日本古典大系 総索引』 岩波書店 1965年

2. 『CD-ROM版 新潮文庫明治の文豪』1997年

3. 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』1995年

2.

3.

文庫タイトル	著者名	文庫タイトル	著者名	文庫タイトル	著者名
平凡・浮雲・ 其面影・あいびき・ めぐりあい 金色夜叉 雁・青年・キタ・ セクスアリス・ 阿部一族・舞姫・ 山椒太夫・高瀬舟 にぎりえ・たけくらべ 武蔵野・ 牛肉と馬鈴薯・ 酒中日記 蒲団・重右衛門の最後・ 田舎教師・生 小泉八雲集 訳詩集 海潮音 吾輩は猫である・ 倫敦塔・幻影の盾・ 坊っちゃん・三四郎・ それから・門・草枕・ 虞美人草・彼岸過迄・ 行人・ころも・道草・ 硝子戸の中・二百十日・ 野分・坑夫・文鳥・ 夢十夜・明暗 野菊の墓 一握の砂・悲しき玩具 歌行燈・高野聖・ 婦系図 土	二葉亭四迷  尾崎 紅葉 森 鷗外  樋口 一葉 国木田独歩  田山 花袋  小泉 八雲 上田 敏 夏目 漱石  伊藤左千夫 石川 啄木 泉 鏡花  長塚 節	羅生門・鼻 小さき者へ・ 生れ出づる悩み 山本五十六 砂の女 華岡青洲の妻 女社長に乾杯! 青春の蹉跎 焼跡のイエス・ 処女懐胎 黒い雨 野菊の墓 歌行燈・高野聖 あすなろ物語 一握の砂・悲しき玩具 ブンとフン 風に吹かれて 剣客商売 沈黙 野火 死者の奢り・銅育 雪国 檸檬 パニック・裸の王様 楡家の人びと 聖少女 モオツァルト・ 無常いう事 一瞬の夏 小僧の神様・ 城の崎にて 破戒 国盗り物語 コンスタンティノー ブルの陥落 新橋烏森口青春篇 太郎物語	芥川龍之介 有島 武郎  阿川 弘之 安部 公房 有吉佐和子 赤川 次郎 石川 達三  石川 淳 井伏 鱒二 伊藤左千夫 泉 鏡花 井上 靖 石川 啄木 井上ひさし 五木 寛之 池波正太郎 遠藤 周作 大岡 昇平 大江健三郎 川端 康成 梶井基次郎 開高 健 北 杜夫 倉橋由美子 小林 秀雄  沢木耕太郎 志賀 直哉  島崎 藤村 司馬遼太郎 塩野 七生  椎名 誠 曾野 綾子	痴人の愛 人間失格 ビルマの豎琴 新源氏物語 冬の旅 二十歳の原点 二十四の瞳 エディプスの恋人 こころ 李陵・山月記 孤高の人 アメリカひじき・ 火垂るの墓 放浪記 にぎりえ・たけくらべ 草の花 若き数学者のアメリカ 風立ちぬ・美しい村 人民は弱し官吏は強し 点と線 銀河鉄道の夜 金閣寺 人生論ノート 忍ぶ川 雁の寺・越前竹人形 塩狩峠 錦繡 友情 世界の終りとハードボ イルド・ワンダーランド 山椒太夫・高瀬舟 路傍の石 さぶ 遠野物語 砂の上の植物群 戦艦武蔵 花埋み	谷崎潤一郎 太宰 治 竹山 道雄 田辺 聖子 立原 正秋 高野 悦子 壺井 栄 筒井 康隆 夏目 漱石 中島 敦 新田 次郎 野坂 昭和  林 芙美子 樋口 一葉 福永 武彦 藤原 正彦 堀 辰雄 星 新一 松本 清張 宮沢 賢治 三島由紀夫 三木 清 三浦 哲郎 水上 勉 三浦 綾子 宮本 輝 武者小路実篤 村上 春樹  森 鷗外 山本 有三 山本周五郎 柳田 国男 吉行淳之介 吉村 昭 渡辺 淳一

## 参考文献

秋元美晴「文法化現象——「ふり」から「ぶり」へ, 及び「さま」から「ざま」への接辞化——」 神奈川大学『人文研究』 第122集 1994年

Hopper, Paul J. On some principles of grammaticization. (In Traugott, Elizabeth C. and Bernd Heine. *Approaches to Grammaticalization*. 2 vols. Amsterdam: John Benjamins.) 1991.

Hopper, Paul J. and Traugott, Elizabeth C. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge UP. 1993.

日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』小学館 1972～1976年